
私の恋の物語

直斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の恋の物語

【Nコード】

N7448Z

【作者名】

直斗

【あらすじ】

少女は恋がどのようなものかも知らなかった

これはそんな少女の恋の物語

親友

私は月宮姫乃、つきみやひめの15歳。

水蓮寺学園高等部1年生。

両親とは事情があつて一緒に暮らせない。

だから私は一人暮らしをしていて生活費は両親から仕送りされる。

「隼人、体調はどう？」

彼は早乙女隼人。さおとめはやと

私の友達で学校も同じ水蓮寺学園高等部1年で三大財閥のひとつ早乙女財閥の御曹子。

「姫乃！大丈夫だよ。最近は落ち着いてる」

そして隼人は心臓が悪い。

無理をすると発作をおこす。

それが悪化して今は入院している。

「早く退院できるといいね」

「そうだな…早く外で運動したい」

「張り切りすぎてまた体調崩さないようにね」

「分かってる」

コンコン

「姫乃ちゃんちょっと来てもらえる？」

この人は隼人のお母さん。

おばさんは夕飯を誘ってくれたりする。

「分かりました。ちょっと行ってくるね」

「ああ」

「どうしたんですか？」

「隼人のことなんだけど」

「隼人の…こと？」

隼人のことと言われた瞬間私は嫌な予感がした。

「ええ…このままだと隼人は…あと三年もてば…いい方だって」
嫌な予感、当たった。当たってしまった。

「そんな！だって」

涙が出てきた。

「泣かないで姫乃ちゃん」

「あんなに…元気なのに」

「今もかなり無理をしているみたいなの」

「隼人が…あと三年でって…そんなのって」

言葉が出てこないくらい私は泣いてしまった。

数分後

「落ち着いた？」

「はい…」

「私ね姫乃ちゃんにお願いがあるの」

「願い…ですか？」

「ええ。隼人は学校に行きたがってるから母親としては行かせてあげたいの…」

「…」

「でもあの子は一人でおいておけばきつと無理をしてしまうでしょう？だから姫乃ちゃんに隼人を支えてもらいたい」

「私でよければ、必ず隼人を支えます。無理をしないように」

「ありがとう、姫乃ちゃん。それからこのことは学校の人々には…言わないでもらいたい」

「え？どうして」

「もしみんなが知ってしまったら、みんな氣を使うでしょ？」

「はい」

「それは隼人に今までと同じ態度で接しなくなるといこと。それだけはさけないの」

「そっか…やっぱり隼人のことよく考えてるんだな。おばさんは…」

「…分かりました。みんなには言いません」

「本当にありがとう。姫乃ちゃんにばかりこんな辛い思いさせてごめんなさい」

「気にしないでください」私は微笑みながら答えた。

ガラッ

「隼人。…寝ちゃったか。また来るね。おばさん、また来ますね」

「ありがとう。姫乃ちゃん」

「さようなら」

私はおばさんにお辞儀をし家に帰った。

もう一人の親友

翌日、私は昨日のことはなかったかのように学校に登校した。

「姫ちゃんおはよー」

「おはよー」

「おはよう姫」

「おはよう」

「姫乃、おはよー」

「おはよ。林檎」

彼女は相楽林檎。さがらこうじ

私のもう一人の友達。

「昨日も隼人のお見舞行ってたの？」

「…うん」

「何かあったの？」

あの事は内緒って、言わないって言ったから言っちゃダメだよ…。

「何もないよ。」

「本当に？」

「うん。何かあったらちゃんと林檎に相談する。林檎は親友だもん」

「わかった」

お昼休み、私は林檎とご飯を食べていた。

「なんか隼人がいないと落ち着かないな…」

「姫乃、隼人のこと好きなんじゃないの？」

「そつ、そんなじゃないよ！私はただの…そうただの友達で…だから…その…とにかく違うの！」

「はいはい」

「それに…隼人には好きな人がいるって話だし」

「直接本人に聞いたの？」

「直接は聞いてない…聞くの怖いし…」

プツと笑われた。

「やっぱり姫乃は隼人が好きなんだよ。だから聞くのが怖い」

「そう…なのかな」

私は…隼人が好き？わからない…。今まで恋愛というものをしたことがないから。恋って何なんだろ。

「絶対そうよ。まあ確かに隼人ってあの大財閥早乙女グループの御曹子だしルックスいいし性格もいい人当たりもよくて最高の人だよ
ね」

「うん…いい人」

「私も好きだったんだ。隼人のこと。まあ好きっていうよりも憧れだったのかなあ…告白したんだけどね。フラれちゃった」

「そう…なんだ」

「姫乃、どうしたの？」

「なんかこう…モヤモヤするっていうか」

またプツと笑われた。

「やっぱり姫乃は隼人が好きなんだよ。モヤモヤするのは好きな人が誰かから告白されたりとか、付き合っちゃったりしたときとかに
そうなるの」

「そっか…私、隼人のこと好きなんだ。これが恋なんだ」

「これが恋ってまるで今まで恋愛をしたことがないみたいなの」

「ないよ、恋したこと」

「そうなんだ」

「うん」

「でも…そっか、姫乃は隼人のこと…好きなんだね」

「え？」

「私もね、まだ隼人のこと好きなんだ」

「…」

「昔からずっと。だから姫乃は私の恋のライバル。姫乃には負けない！」

「林檎…私は林檎が好き。林檎は大切な親友。…だから林檎とは争

いたくない」

「姫乃っていつもそうだね」

「…え？」

「林檎とは争いたくない。林檎は大切な親友ってキレイ事ばっかいてさ。バカじゃないの？私は姫乃なんか大嫌い！姫乃はいつも私の欲しいものを持つてる！姫乃はいつも…いつも私の欲しいものを横から奪いさつていく！」

「そんな」

そんなつもりじゃないのにと言おうとしたけどその言葉は林檎の言葉に遮られた。

「ねえ、姫乃。私はね、この学校で人気者になろうと思った。…でも人気者になったのは私じゃないあなたよ！私が欲しいと思うものはみんなあなたの物。私はあなたの影の存在でしかない」

「そんなことない！林檎は可愛くて、頼りになるいい人だよ！」

「付き合ってらんない、私もうあなたとは話したくない。もう話しかけないで」

「林檎！」

「話しかけないでって言ってるでしょ！あなたと話しているとイライラの！」

私はそれ以上林檎に話しかけることができなかった。

林檎と私

翌日私は林檎に話しかけようとしたがそれは遮られた。

「ねえねえ林檎」

「実果、どうしたの？」

「月宮さんと林檎最近おかしいよ？」

「いいの。もうあいつとは話さない。決めたから」

「じゃあさ……」

「うん！いいかも」

結局、私は林檎と話せないまま隼人の家に向かった。隼人の家は少し遠い。

「隼人」

「姫乃、来てくれたんだ」

「うん。退院おめでとう。明日からはまた一緒に登校しようね」

「ああ。…姫乃なんか元気ないな」

「…そうかな？元気だよ」笑いながら答えた。

「悩みごとか？」

でも…隼人には気付かれてしまった。

「…うん」

「相楽のことか」

「やっぱり隼人はすごいや。何でも分かっちゃうんだね」

「まあなんとなくだけだな」

「昨日ね、林檎にもう話しかけないでって言われちゃった。林檎は私が大嫌いなんだって」

「あんなに仲が良かったのにな」

「どうしてこんなことに……」

「大丈夫。姫乃なら必ず相楽と分かりあえるよ」

「うん…ありがと、隼人。じゃあ私そろそろ帰るね」
「ああ」
「また明日」

翌日

「姫乃、おはよう」
「おはよう隼人」
その時林檎が通った。
「あつ…林檎おはよう」
林檎はこちらを見たが応えてはくれず睨まれた。
「やつぱり…もうダメなのかな」
「大丈夫だよ。姫乃」
「うん…」
「昨日早乙女は病院を退院した。今日からまた一緒に授業を受けるぞ」

『1年A組早乙女隼人君至急学園長室に来てください』
「ちよつと行ってくるな」
「うん。じゃあ待ってるね」
「ああ」
「ねえ、月宮さんちよつと来てもらえる?」

隼人と私

私は放課後、隼人が学園長に呼ばれている間にトイレに呼び出されていた。

「あれ？姫乃？」

「姫ならさつき相楽達にどこかにつれてかれてたぞ」
「っ！！」

「隼人様、さつき姫ちゃんが使用禁止のトイレにつれてかれてたよ」
「サンキュー」

「あんた最近調子こいてんじゃない？」

「隼人様にあんなに近付いて、何様のつもり？」

「どうせ早乙女財閥のお金目当てなんでしょ」

「ホント月宮ってサイテー」

「林檎！」

「あんたなんか、私にひざまずけばいいのよ！泣いて謝ったって私は許さない」勢いよく大量の水をかけられてしまった。

「林檎……」

「なあに？先生にいいつけるの？いいよ別に言いたければ言えば良いのよ」

笑いながら林檎は答えた。

「私はそんなことしない」

「生意気な」

また水をかけられた。

「こいつ抵抗しないの、つまんねえ」

「写真撮ろ。男子に売れる」

トイレにシャッター音が鳴り響いた。
その時だった。

「お前ら姫乃に何やってんだよ」

「はっ隼人様！」

「これはその…」

その瞬間隼人はインスタントカメラを奪い取り壊した。

「お前らこんなことして恥ずかしくないのかよ！」

「隼人…」

「相楽もだ！何でこんなことしてんだよ…お前は姫乃の親友だろ？」

「違う！月宮は…私から全てを奪った！私の欲しいものも全部！」

「いい加減にしろよ！」

「隼人、もういいから…」

「良くない！」

「いいの！」

「…わかった。お前らさっさと帰れ」

「はい…」

隼人は素早くブレザーを脱いで私に羽織らせてくれた。

「先生を呼んでくる」

「ダメ、先生は呼んじゃダメ」

「…わかった。お前って今日はジャージ持ってきてないんだっけ？」

「うん。体育無かったから…」

「じゃあちよつと待ってる、俺の持ってくる」

「うん…隼人、ありがと」

そのあとすぐにジャージとタオルを持ってきてくれた。

「明日洗ってかえすね」

「いつでもいいよ。やっぱ俺のじゃでかいな」

「うん、ブカブカ」

「じゃ帰るか」

「うん」

「姫乃はさ、優しいよな」

「え？」

「自分がどれだけ被害を受けても先生には絶対に言わない」

「そうかな」

「そうだよ。…なあ姫乃」

「ん？」

「母さんから聞いたんだろ？俺のこと」

「…うん」

「俺さ、お前と出会う前は一日一日を後悔しないように生きてきた。だからいつ死んでもいいって思ってた」

「そんな…」

「でもお前と出会ってから、違う。毎日がたのしくってさ…もっと生きたいって思うんだ」

「隼人…」

「今日の放課後、学園長に呼ばれただろ？」

「うん」

「その時に教えてくれたんだ。学園長の知り合いにとっても腕の良い有名な医者がアメリカにいて…それで、もっと生きたいと願うなら一度アメリカで手術を受けないかって」

「行くの？」

「母さんと相談してからだけだな」

「そっか…」

「ああ。じゃあな」

「うんまた明日」

（無題）

その日の夜隼人からメールが来た。

『アメリカに検査に行くことにした。そのあとのことは検査してみないことには分からない』

『そっか。いつアメリカに行くの？』

『明明後日にアメリカに行つて検査入院する』

『明明後日なの！？また学校これなくなるんだね…』

『今回は検査だけだからすぐに帰つてくれる』

『そっか。じゃあまた明日』

『また明日』

そして隼人が検査入院するため渡米する日になった。

「隼人、おはよー」

「おはよう」

「今日…なんだよね」

「ああ…まあすぐに帰ってくるさ」

「うん」

「ねえ月宮」

「林檎…」

「隼人は？」

「今日からアメリカだけど」

「…え！？なんで？」

「心臓の検査に」

「なんであんたが知ってるの？」

「隼人が教えてくれた」

「…やっぱりあんたはズルい」

「林檎」

「月宮、私今度隼人に告白するから」

「…そう」

放課後

携帯なってる…。

隼人だ！

『もしもし、姫乃』

「もしもし」

『アメリカについた。とりあえず検査入院して来週までには帰れる』

「そっか」

『じゃあまた』

「うん」

「月宮！隼人いつ帰ってくるの？」

「来週までには帰ってくるって」

「そう」

「ねえ林檎」

「なによ」

「最近よく話してくれるね」

「…うっさい！」

それから数日後隼人から電話かかってきた。

『もしもし』

「もしもし」

『明日には帰れる』

「そうなの？」

『ああ詳しい事は帰ったら教える』

「わかった」

翌日

「姫乃」

「隼人！おかえり」

「ただいま。上がってくれ」

「検査した結果は…手術をして助かる確率は50%…生きるか死ぬか」

「そんな…」

「でも俺は行く。こっちでなにもしないまま死ぬよりはできる限りのことをしたい」

「そっか…いつ行くの？」

「春休みの間に手術しにまた渡米する」

「春…休み」

「手術は早い方がいいって言われたんだ…でも今年度は学校に行きたいと思って」

「そっか…。あつ私そろそろ帰らなきゃ」

「ああ。また明日」

「また明日」

「よお久しぶり」

「おお！隼人じゃねえか久しぶりだなあ！」

「隼人様！」

「隼人！」

「相楽…」

「放課後…屋上に来て」

「…わかった」

「姫乃、ノートありがとな」

「うん」

隼人の想い、林檎の想い、私の想い、そして私の真実

放課後

「屋上か…ちよつと行ってくる。待っててくれ」

「…うん」

先に帰った方がいいのかな…

「月宮さん、体育館裏に来てくれって言ってる人いたよ」

「体育館裏？わかった」

「隼人！来てくれたんだ…ありがとう」

「礼はいい。それより話ってなんだ？」

「私…私隼人のこと好き！だから付き合っで欲しいの」

「…悪い。俺、好きなやついるから無理だ。ごめん」

「やつぱり月宮がいいんだね…月宮のどこがいいの？どうしてみんな月宮が好きなの？」

「あいつは優しい。それに一緒にいると落ち着くし楽しいんだ」

「月宮なんか…死んじゃえばいいんだ」

「…え？」

「ほら隼人。体育館裏見てみなよ」

「姫乃…」

「月宮囲まれちゃってかわいそうに。あいつらに勝てるやつなんかいない。この辺じゃかなり有名なヤンキーだから」

「姫乃！」

「隼人が私と付き合っでくれたら月宮を助けてあげるよ？」

「お前いつの間にそんな最低なやつになったんだよ」

「っ！だつて私はどんな手を使っでても隼人と付き合いたいんだもん！隼人が好きなんだもん！」

「相楽…」

「みんな！久しぶりね、どうしたの？」

「姉御！もしかして姉御をシメると言われたのか？俺らは」

「姉御に勝てるわけないだろ」

「そもそも姉御とやりあうわけないだろ」

「そうだよ。俺たちは姉御についていくと決めたんっす」

「誰が私をシメろって言ったの？」

「相楽林檎ツスよ姉御」

「そう…それともう私は姉御じゃないわ。ただの高校生だもの」

「でも俺たちが姉御を襲って負けた日から姉御は姉御です」

「あなたたちは早く帰りなさい。問題になったら困るでしょ」

「はい！姉御」

「どういうこと！？みんな帰っていった」

「姫乃…良かった」

「林檎」

「月宮…どうしてあいつら帰っていったの！？」

「…姫乃」

「彼らは私の…私の元舎弟よ」

「舎弟…？」

「そう、舎弟。彼らは自分たちより強い人について行って自分たちより弱い人は従わせるって感じのヤンキー集団だったの」

「じゃあなんであんたはあいつらの上に立ってたのよ！」

「彼らが私にケンカを売ってきたの。夜出歩いている人にケンカを売るのが彼らのやりかただから」

「ケンカを買ったのか？」

「買ったわけじゃないんだけど問答無用でケンカをふっかけてきたの。で、仕方ないから戦った結果こうなった」

「そんなバカな話…」

「聞いたことない？黄金の魔女って名前」

「え…」

「あの…この辺シメてたって有名な？」

「そう…黄金の魔女。私の二つ名。ホントは知られなくなかった…
黙っててごめん」

私は屋上から逃げるように立ち去った。

「姫乃！こんなとこにいたのか」

「隼人！なんで…来たの？この事知ったら怖がると思って」

「姫乃が好きだから」

「…え？」

「俺は姫乃が好きだ」

「うそ…」

「うそじゃない。お前が好きなんだ」

「私は…私も…好き！ありがとう…隼人。でも…私はっ」

私は貴方に伝えていない事がある。だまっていることがある。たっ
たそれだけの言葉なのに言えない。

「俺はアメリカに手術に行く。だから…もしかしたらお前に辛い思
いをさせるかもしれない…それでもいいなら付き合ってくれ」

「…少しだけ待ってもらってもいい？」

「ああ」

その日はおばさんが一緒にご飯を食べようと誘ってくれていたの
で一緒に隼人の家に帰った。

「今日は晩ご飯誘ってくださってありがとうございます」

「気にしないでいいのよ」

私はこの人たちをこれ以上騙したくない…

「あの！」

「どうしたの？」

「大事な話があるんです」

「大事な話？」

「はい」

「大事な話ってなんだ？」

「…私は、お二人を騙していました。申し訳ありません」
「騙してた？」

「はい。…私は今までお二人に嘘をついて騙していました」

「嘘…とは？」

「お二人は一条財閥と鳴神財閥はご存知ですよ」

「ええ。一応ライバルの財閥ですしパーティーなどでもよくご夫婦にお会いしますから」

「俺もパーティーとかで会うから知ってる」

「では4代目と5代目のことも当然ご存知ということですよ」

「ええ」

「…彼らは私の両親です」

「…え」

「だってお前こつち来たとき両親は亡くなったって」

「だから嘘をついていると申し上げたのです。私の両親は生きています。一条財閥4代目と鳴神財閥5代目が私の親です」

「ええ！？」

「マジ…かよ」

「でもパーティーなどいつもご夫婦だけで誰も傍にいなかったわよ」
「それは私がパーティーなどにはいつも出席していなかったからです」

「じゃあいずれは姫乃ちゃんが財閥の後を継ぐの？」

「はい。私しか後継者はおりませんので」

「…そうだったのね」

「一条財閥と鳴神財閥を合併して新たな財閥にする予定でその財閥の後継ぎとなります」

「姫乃が…」

「…私そろそろ帰りますね。少しずつでも家の片付けを始めないと」
「片付け？」

「はい。早ければ今学期の終わりに遅くても来年度中には本邸にも

どるので…」

「本邸に…」

「はい。本当にすみませんでした。…さようなら」

「姫乃！」

「隼…人。ごめん…私今までずっと嘘ついてて」

「いいんだ。それなりの理由があったんだろ」

「…私の両親は私と同じで幼い頃から財閥を背負うことが決められていた。でも私とは決定的に違うことがあった」

「決定的に…違うこと？」

私は静かに頷いた。

「お父様とお母様はお祖父様たちの間で勝手に決められた許嫁でいわゆる政略結婚だったの」

「…」

「二人とも会うまでは親が勝手に決めた婚約者なんて嫌だったんだって。結局は結婚してよかったって言うてたけどね。だから二人は私に嫌な思いをしてほしくないって、私に普通の恋をしてほしいって」

「普通の恋か…」

「でも今日…私の普通の恋は終わるんだって思った」

「どうしてだ？」

「だって隼人に嘘をつけなかった」

「…」

「私の恋はもう普通の恋じゃない」

「それでも恋は恋だ」

「え？」

「俺の親も俺に普通の恋をしてほしいってさ」

「普通の恋って…なんなんだろ」

「…思ったんだけど俺たちは俺たちにとっての普通の恋をすればいいんじゃないか？」

「？」

「俺たちがみんなに合わせる必要はないんじゃないかってこと」
「……」

「俺たちは俺たちだ。俺たちの恋をすればいいんじゃないか？」

「そっか…そうだね」

「だから姫乃…俺と付き合ってくれないか？」

「うん」

その後、隼人は私の家まで送ってくれた。

「隼人」

「どうした？」

「私、学校今週で辞めることになったの……」

「そっか……」

「だから明日で月宮姫乃は退学する」

「じゃあまた明日な」

「うん」

イツワリの終わり

翌日

「姫乃！」

「隼人おはよう」

「おはよう。今日で姫乃退学するんだよね……」

「うん。寂しい？」

「まあな。姫乃に会えなくなると思うと」

「まあ私が退学しても毎日会えるよ」

「そうだな」

「これで今日の授業は終わりだ。…そして残念な知らせだ。月宮前
に出る」

「はい」

私は教卓の横に立った。

「月宮は家庭の事情で学校を辞めることになった。月宮最後に挨拶
を」

「はい。…ご迷惑も多々おかけしましたが皆さん今までありがとう
ございました。また会いましょう」

「…よし。じゃあみんな早く下校しろよ」

「姫…乃。その…今までごめん。私、本当に酷いことして」

「林檎…」

「私、悔しかった。姫乃は成績優秀で美人で姫乃なら隼人と釣り合
う人間だって思った。私と隼人じゃ釣り合わない。ずっと悔しくて
悔しくてたまらなかった。成績優秀者は馬鹿を近付けないだろと思
って姫乃に近付いた。姫乃は他の成績優秀者とは違って私にも優し
く接してくれた。最初は嬉しかったんだ」

「うん…」

「でも近くに行けば行くほど姫乃は遠い存在だ、私には追いつくことはできないってわかった。そしたら急に怖くなったんだ」

「怖くなった？」

「うん。それであんな酷いことしちゃった。今はすごく後悔してる。ずっと謝ろうって思ってたんだけどなかなか言い出せなかった」

「……」

「だから最後に言っておきたかった。今までごめん、先生に言わなideくれてありがとう。それから仲良くしてくれてありがとう」

「気にしないで、林檎。それから私も仲良くしてくれてありがとう」

「姫乃、帰るか」

「うん」

「今度一緒に出掛けようか」

「そうだね。私たちはいつでも会えるもん。あ、でも明日、明後日は私本邸に帰らなきゃ行けないの」

「本邸に？」

「うん、今後のこと両親と話し合ってくるの」

「そっか……じゃあまたな」

「うん。気を付けてね」

翌日、私は一条家の本邸に帰った。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「姫乃、おかえり」

「おかえりなさい姫乃」

「ただいま帰りました。お父様、お母様」

「さあ上がりなさい」

「本邸に帰ってきたということはお付き合っている方がいるというのかい？」

「はい」

「お相手はどのような方なの？」

「お二人もよくご存知の早乙女財閥御曹司の早乙女隼人君です」

「ああ隼人君か。いい子だね」

「貴女はそれでいいの？」

「はい。それでお二人にご相談が…」

「わかったわ。ちゃんと取り計らっておくわ」

「任せておけ、姫乃」

「ありがとうございます、お父様、お母様」

新しい日々のはじまり

月曜日

「ホームルームを始める前に転校生を紹介する。入れ」
扉が開いた瞬間教室はざわついた。

あれって…

うそだろ…

「転校生の一条姫乃さん。一条は一条、鳴神両財閥の嫡女だ」

「初めまして。一条姫乃です。財閥のことは気にせず仲良くしてください。よろしくお願いします」

「姫乃どうして学校に…」

「隼人、私は前にちゃんと言ったよ。“月宮姫乃”は退学するってずりいや。でもまた学校一緒に通えるんだな」

「うん」

「姫乃」

「林檎！」

「本当に財閥の娘…なの？」

「…うん。騙してごめん」

「もう…会えないかと思った」

「林檎、今日の放課後空いてる？」

「うん、空いてるよ。でもどうして？」

「ちゃんと私のこと教えるから」

「じゃあ私の家にくる？」

「ううん。私の家に来て」

「えっ？いいの？」

「うん。もう隠し事はしたくないから」

「わかった」

「今日の帰りは車出してもらってから一緒に乗って行って」
「うん」

放課後

「お帰りなさいませ、お嬢様」

執事の氷室が待っていた。

「林檎乗って」

「う…うん」

「林檎、どうしたの？」

「これってリムジンだよな？」

「そうだけど」

「こういうのってテレビでしか見たことない…」

「まあそうだよな。乗って大丈夫だから。…隼人もくる？」

「いや、俺はいい。二人でゆっくり話してこいよ」

「うん。あ、そうだ夜会の招待状届いてるよね？」

「ああ、だからまた後でな」

「うん。氷室、車出して」

「はい」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「用意はできております」

「ありがとうございます」

「ここで待っていて」

私はソファーに林檎を待たせて部屋に着替えにいった。

「姫乃様、お着替えお手伝いします」

「ありがとうございます、紫苑」

「今日はシンプルなＴシャツなどですか？」

「いいえ…お嬢様らしいワンピースをお願いします」

「珍しいですね。姫乃様がお嬢様らしいワンピースだなんて」

「もう嘘はつかないことにしたの」

「このワンピースはいかがですか？」

紫苑は赤い襟元にファーがついたドレスのようなワンピースを出してきた。

「うん。それでいい」

「髪はどうなさいますか？」

「そうね…編み込みをいれてくれる？」

「わかりました」

「待たせてごめんなさい」

「キレイ…」

「これが本当の私」

「スゴくキレイだよ姫乃」

「ありがとそれで本題。私のこと教えるね」

「うん」

私は私の真実を林檎に話した。

私が財閥の娘であること、何故高校に通っているのかなどのすべてを話した。

「そっか…そうだったんだね」

「本当に今までごめん。許してほしいとは言わない、でももし良かったらもう一度友達になってほしいの」

「私は…姫乃を許さない！」

「そっか…やっぱそうだよね…許してもらえるわけ…ないよね」

「…なんてね」

林檎はにっこり微笑んだ。

「え？」

「私は姫乃を許すよ。…だから友達になってください」

「それはこっちの台詞だよ、林檎」

「うっん、私の台詞だよ。私は姫乃に嫌われても当たり前のことを

した。私は姫乃をいじめたんだから……。こんな私でもいいの？ 貴女を苦しめた私で本当にいいの？」

「うん」

「ありがとう姫乃」

「こっちこそ…ありがとう林檎」

「あつ…もうこんな時間」

時計の針は6時を指していた。

「私そろそろ帰らないと」

「送っていくよ」

「そんな悪いよ」

「悪いなんて思わなくていいんだよ。私たちは友達、でしょ？」

「うん」

「姫乃様」

「どうしたの？ 紫苑」

「奥様からご連絡がありました。ドレスなどは本邸に用意してあると」

「わかったわ」

「林檎、行こ」

「うん」

「氷室、車出して」

私は林檎の住所を言った。

「わかりました。お嬢様」

林檎の家につき林檎を車からおろした。

「姫乃ありがとう」

「ううん、じゃあまた明日」

「うん、また明日」

私は急いで鳴神の本邸に帰った。

夜会

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「姫乃、早く控え室にいらっしゃい」

私はついてすぐにお母様に呼ばれた。

「はい、お母様。紫苑もきて」

「はい、姫乃様」

「はい、これ。貴女にぴったりだと思うのだけれど」

そう言ってお母様は桜色のイブニングドレスを差し出してきた。

「ありがとう、お母様」

私は桜色の真新しいドレスに着替えた。

「氷室！」

「お呼びでしょうか、奥様」

「祐希を控え室に早乙女さんたちを応接間に通してちょうだい」

「承知しました」

「紫苑、姫乃の髪をキレイに整えてあげて」

「はい」

「すごく可愛いわ、姫乃。やっぱり似合うわね」

「ありがとうお母様」

ノックの音が響いた。

「奥様、早乙女潤様、鈴音様、隼人様を応接間にお通ししました」

「ありがとう氷室。あなた行くわよ」

「ああ」

「姫乃もよ」

「え？あ、はい」

私は引つ張られるようにお母様につれていかれた。

「入るわね」

私たち家族は応接間に入った。

「久しぶりだな潤、鈴音ちゃん、それに隼人君も久しぶり」

「お久しぶり潤君、鈴ちゃん、隼人君」

お父様お母様が旧友の早乙女夫妻と隼人に久しぶりの挨拶をしていた。

「ああ久しぶりだな祐希、夜空もこの娘こが姫乃ちゃんかい？」

私は挨拶をした。

「ご挨拶が遅れました。一条姫乃です。はじめまして早乙女潤さん
私は隼人のお父さんに会ったことがなく今日初めて会った。

第一印象はとても穏やかで優しいような人だった。

「はじめまして、とても美しい娘だね、祐希と夜空の子どもだけ
ある」

「ありがとうございます」

「久しぶり祐君、空ちゃん、姫乃ちゃん」

「お久しぶりです。一条さん、鳴神さん」

「お久しぶりです、えっと…早乙女さん」

「おばさんでいいわよ」

微笑みながら言ってくれた。

「潤も鈴音ちゃんも隼人君から聞いているかい？」

「ああ、隼人が姫乃ちゃんと付き合っていると」

「でだ、もしよかったら隼人君と姫乃を婚約関係にしたいんだが…」

「婚約か…隼人はそれでいいのか？」

「ああ、姫乃ならいい、いや…姫乃じゃなきゃ嫌だ」

「潤、私も大歓迎よ。姫乃ちゃんはとても良い娘ですもの」

「そうか。なら俺もいい」

「じゃあ」

「ああ、姫乃ちゃんと隼人を婚約関係としよう」

「良かったな、姫乃」

「うん、ありがとう」

「じゃあ私たちは先に会場に向かうわ、空ちゃん」

「うん、氷室。会場までお連れして」

「はい、奥様。こちらです早乙女様」

「ありがとう」

そう言って早乙女一家は夜会会場に向かった。

「姫乃、このペンダントを」

そう言っってお母様はシルバーのハート形になっていてモルガナイトが散りばめられているペンダントを私に差し出した。

「これは？」

「鳴神家は代々、婚約相手が決まった娘にペンダントをあげるの。」

…姫乃おめでとう」

「お母様：ありがとう…：ございます」

「さあ、つけてあげるわ」

胸元にお母様がくれたペンダントが輝いた。

「会場に行きましょう」

そう言っ会場に向かった。

先にお父様とお母様が会場に入り夜会に来た方々の前で挨拶をした。
「皆様、本日は当家主催の夜会に来ていただきありがとうございます。本日は皆様に紹介する人がおります」

「おいで」

お父様に呼ばれ私は舞台に出た。

会場にいる全員が私に注目した。

「私たちの娘です」

私は会場にいる全員に向かい挨拶をした。

「はじめまして、姫乃と申します。今までこのような場には私事があり出席できなかったのですが本日やっと、出席することができました」

会場がざわめいた。

あれが姫乃ちゃんか

とても優しそうで美しい娘さんじゃないか
是非とも我が息子の嫁にもらいたいものだ

「そしてもう一人。我が娘の婚約者早乙女隼人君だ」

その紹介とともに隼人が舞台に出た。

「皆様お久しぶりです」

「二人は今日婚約関係を結びました。どうぞ二人を支えてやってください」

会場は一瞬静まり返りその後拍手の音が会場に響いた。

そしておめでとうという言葉や隼人良かったなどの言葉が聞こえた。

私が隼人を見ると隼人も私を見ていた。

目が合い私は微笑んだ。

すると隼人も私に微笑みかけてくれた。

その後私は夜会で他財閥の当主夫妻やご令嬢やご子息などご挨拶をし初めて出席した夜会は終わった。

夜会の後

夜会が終わるとお父様とお母様は早乙女夫妻と久しぶりの再会だった。で沢山話をしたいらしく早乙女一家はそのまま鳴神の屋敷に泊まることになった。

「それにしてもまさか俺の息子と祐希の娘さんが婚約することになるとはな」

「本当だな、俺たち学生時代あんなに仲が悪かったのにな、夜空取り合ったり」

「今となったら笑い話だな」

二人は笑いながら話をしている。

お母様もおばさんと話していた。

その時隼人が話しかけてきた。

「少し外にでないか？」

「うん」

私たちはお父様とお母様それに早乙女夫妻に断りをいれ、庭に出た。

「やっぱり少し寒いな」

風が吹いていてまだ少し寒い。

「隼人」

「ん？何？」

「その…病気の方はどうなの？」

「最近は落ち着いてるよ。発作もないし」

「そっか…ならよかった」

「安心した？」

「うん」

私は安心したからか涙を流していた。

隼人はそれに気付き私を抱き締めてくれた。

「ごめん…俺がこんなんじゃないかったら姫乃に辛い思いをさせずにすむのに」

「隼…人」

「俺さ、今手術早めに受けにいかうかって考えてるんだ」
「え？」

急によみがえったあの日の声。

『手術をして助かる確率は50%…生きるか死ぬか』

「どうした？」

「う、ううん…何でもないよ」

笑顔で答えた。

「何でもないって顔してないぞ」

やっぱり隼人は気付いた。

「…隼人が…前に言ってた言葉…思い出して…生きるか…死ぬかって…」

「姫乃」

そう言つて隼人は私にキスをした。

急にしてきたので私はビククリした。

隼人も私も顔を赤くしていた。

「隼…人？」

「大丈夫だ。俺は死なない。必ず姫乃のところに帰ってくる。だから…」

そう言つて隼人はポケットから小さな箱を出して私に手渡した。

「姫乃に。開けてみて」

私は小さな箱を開けた。

中にはシルバーにダイヤが数個散りばめられた指輪が入っていた。

隼人はそれをとって私の左手薬指につけた。

「俺の婚約者つて証、婚約指輪だ」

「きれい…」

「俺がちゃんと働いて稼いだ金で買った。父さんの手伝いをして、
だけどな」

「隼人が？」

「ああ。アクセ禁止じゃないとはいえまだ学生だからあんまり目立

たないやつにしたんだ。それなら学校でもつけられると思って」

「ありがと、嬉しいよ隼人。…愛してるよ」

そつと隼人にキスをした。

「俺も愛してる、姫乃」

隼人にその言葉を言われるとなんだかくすぐったかった。

そのあと少しだけ話をした。

「そろそろ体冷えちゃうし戻ろっか」

そのあと私たちはお父様たちのいる部屋に戻って隼人の昔の話などを聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448z/>

私の恋の物語

2012年1月5日18時52分発行